

2018年度 大阪大学言語社会学会・言語文化学会
合同研究発表会（大阪大学言語文化学会第53回大会）

2018年6月28日 於大阪大学箕面キャンパス

発表要旨（言語文化学会会員）

第2会場（E102教室）

15:45-16:15

Sur la prononciation réelle des modèles intonatifs non conclusifs
dans les phrases assertives en français

服部 拓哉（D1）

フランス語の平叙文は、音調から見ると最終のリズムグループ（groupe rythmique）が下降し、それ以外は上昇する。

Jean Pierre, qui est un charmant garçon, fera tout pour vous aider. (Rossi, 1999: 100)

/ʒɑ̃ pjɛʁ | ki ɛt œ̃ ʃaʁ.mɑ̃ gaʁ.sɑ̃ | f(ə.)ʁa tu | puʁ vuʒœ̃.de\ /

本発表では、フランス語の平叙文における、非最終のリズムグループにおける音調について、発音実態の分析を行う。

フランス語において、典型的に見られる音調パターンの分析モデルについては、Delattre (1966) や Martin (1977, 1981) が多くの研究者によって用いられている有力な枠組みである。前者は、上昇量の観点から非最終部を Continuation mineure (Cm) と Continuation Majeure (CM) の2パターンに分けている。また後者は、非最終部を、ほぼ Cm に相当するが、末尾が『下がる』contour 1、CM に相当する contour 2、Cm に相当する contour 3 という、3種類の音調曲線に分類している。また新しく、比較的詳細にわたる Di Cristo (2016) のモデルでは、Delattre と Martin の枠組みを踏襲しつつ、独自の形式的に新しいアプローチを提唱している。このように、非最終部については、研究者間で記述の相違が見られる。

そこで本発表ではまず、フランス語母語話者による音声を対象に、発音実態の客観的記述を行う。これはまた、いずれの分析モデルにおいても実証データの詳細が省略されており、それらの再検証を行う意味も含まれる。漸降性（déclinaison）の影響を考慮するため、主音（tonique）だけでなく全体的な音調に対して分析を行う。

本発表はとくに、現在まで考慮されていなかった、ピッチ上昇幅についての具体的な数値を含むものである。従来の研究では、何度上がる、何段階上がる、といった抽象的なレベルが想定されていた。自然な上昇範囲の算出は、リズムグループを音調的に同定する一つの指標になるという学術的価値に加え、今後のフランス語教育において、コンピュータによる評価やアプリを用いた自習の実現に寄与する。

16:20-16:50

循環する2つの語りと関係性の構築—日本語教育の現場から—

佐川祥予 (D1)

「語り」には、「語られたもの」と「語る行為」という2つの側面があるが(野家 2005)、本発表は第二言語教育学の文脈において後者に焦点を当てる。これまで、語りに関する研究は、文学理論や歴史哲学をはじめとして、臨床心理学、社会学、看護学、医学、教育学など様々な分野で、人間科学の方法論や文化の基礎理論として研究されてきた(野家 2005)。語りの研究が分野を問わずなされている理由として、語りが、『『物語る存在』という視点から人間の生の営みの意味に迫ろうとする人間研究の性格』(鳶野 2003)を持っていることが挙げられる。近年、日本語教育学において、動的な「語る行為」に着目した研究が発展しつつある(嶋津 2005、三代 2014, 2015)が、人間にとっての語りとは何か、言語や教育とどのような関係があるのか、といった議論は未だ十分になされていない。

本発表では、J. S. ブルーナーを中心に言語の発達の地点から人の語る行為を捉え、語りには「閉じられた語り」と「開かれた語り」という2つのスタイルがあることを論じ、実際の語りを育む教室実践において日本語学習者が語りの循環を多彩に展開している姿を提示する。また、本発表で提示する語りの射程には、言語と自己の形成、他者との関係性の構築といったテーマが含まれている。言語を用いて学習者が為そうとしていることは何か、という原点に立ち戻り、改めて学習者の言語活動の実態を眺めることが可能となる。本発表では、語りという視点から拓かれる日本語教育のあり方について言及したい。

16:55-17:25

翻訳シフト分析の有効性と限界—翻訳教育の視点から—

長谷川 泰子 (D1)

翻訳とは、翻訳理論の基底概念である「翻訳等価性」を実現する行為であり、「言語的・社会的等価実現行為」(河原, 2010)であるとされている。だが、実際の英日・日英双方向の翻訳において、言語文化の差異などの理由から、翻訳者は「英語らしさ」や「日本語らしさ」をもつ翻訳文を訳出するために、適宜、テキストの変更や編集を行っている。また、翻訳者は、異なる言語や文化を持つ人々のコミュニケーションの仲介者の役割を担うことが期待されている。これらを鑑みて、本研究では、翻訳現象の一つであり翻訳につきまとう起点テキストと目標テキストの齟齬ないしズレ、つまり「翻訳シフト」に着目した。研究方法については、日本人のプロ翻訳者と学習者の英日翻訳データを入手し、分類学的言語学によるアプローチから翻訳シフトの包括的モデルを作り出そうと試みた Vinay and Darbelnet (1995/2004)の類型に基づいて、翻訳シフトを抽出・分類し、量的・質的に比較・分析した。この分析結果に基づき、Vinay and Darbelnet の類型を使用したシフト分析アプローチは、良い(コミュニケーションとして効果的な)翻訳の特徴と性質を解明するのに有効かどうかについて議論する。

さらに、翻訳の使用は外国語教育に適さないのか、という疑問に対する学術的議論が、最近活発になってきている(山田, 2015)。これに鑑みて、翻訳教育の視点からシフト分析ア

アプローチは有効かどうかについて議論する。具体的には、プロ翻訳者と学習者の翻訳シフト分析能力に焦点を絞り、その背後にある翻訳ストラテジーを前景化することによって比較・分析を行い、シフト分析アプローチの有効性と限界について解明することを目的とする。

第 4 会場 (E104 教室)

15:10-15:40

構築主義のジェンダー観から英文和訳における女性語の増訳を考察する
— *The Age of Innocence* の May の言語使用を中心として —

趙 洋 (言語文化専攻 D2)

女性専用表現と男性専用表現という概念が段々と薄くなっていく今の日本社会で、外国人女性の発話は、特に英語小説の日本語訳の中で、大量に女性語で翻訳されているということが指摘されている。その中で、日本語の特徴と言える文末表現の増訳は最も興味深いと思われる。筆者は、中村桃子が『ことばとジェンダー』(2001)で提案した構築主義のジェンダー観を理論的な枠組みとし、ジェンダー・アイデンティティという概念を踏まえ、*The Age of Innocence* (Edith Wharton, 1920) の May という女性キャラクターの言語使用について分析する。それを通し、英語の言語システムの中で存在しない女性用終助詞は訳者によってどのように増訳されるのか、そして訳者は女性用終助詞を増訳することでどのような効果を意図しているのかについて構築主義のジェンダー観から考察したい。

日常において日本人女性は、特に若い女性たちは、いわゆる「女性語」をあまり使わなくなってきた傾向があると多く報告されている。しかしながら、本作品の訳者は逆に女性用終助詞をはじめとする女性語を道具とし、意図的に発言の文末に加えて増訳することを選択した。このような増訳により、女性キャラクターの人物像を構築することが実現できた。本稿では、その結果、同一発話者でも性別の制限から逸脱し、発話の場におけるいろいろな要素に応じ、多様なジェンダー・アイデンティティを呈していることを明確にした。日常生活と異なり、小説のようなメディアにおいて、女性用終助詞は実際に使っている言語の一種というより、伝統的な価値観を読者の脳裏に埋め込み、現代女性のイメージと直結する言語モデルであるということが示唆された。そして、その過程の中で、日本語母語者の読者に「女性はこういうように話すべきだ」という意識を強化しながら、人物像を効率よく構築することができたと主張する。

15:45-16:15

オートエスノグラフィーの可能性

林 桂生 (修了生)

文化人類学批判の『文化を書く』の出版以来、「物語（フィクション）の一登場人物である民族誌家は、いまや舞台の中央にいる」（クリフォード 1996）はずであり、様々な実験的民族誌の試みがなされてきた。オートエスノグラフィーはその最たるものの一つであり、社会学者のエリスとボクナーは「読者のものの見方を広げること、（…）読者を能動的に対話へと導くこと」という、ある意味啓発的な目的を持ったナラティブ探求に基づくオートエスノグラフィーを推進するが、自分の弱さをさらけ出し、「読者の心をつかみ、感動させ、癒しを与えること」、共感を得ることなどをもゴールとするため、小説のように書くことを強調する。

発達障害へのオートエスノグラフィーの適用について、本発表者は当事者であるが、発達障害は時として健常者からは理解しにくいその心身の特性から、小説のように描写したからといって必ずしも共感を得られる障害ではないと認識している。高機能自閉症の故ドナ・ウィリアムズが自伝を書いたのは自分の過去を確認するためであって他者に共感されるためではなく、原稿を誰かに読ませることで自分の世界が「汚（けが）されてしまう」とさえ感じていた。目指すものは共感より先に事実に対する理解である。オートエスノグラフィーに、共感を得るための一人称で語る小説のような技巧は必要なのだろうか。本発表では、他者に共感しにくい障害特性を有する自閉症に関するオートエスノグラフィーを当事者が他者からの共感を求めて記述するよりも、『文化を書く』以前の一見主観を排した写實的記述に徹してみるものの可能性を探る。

〈参考文献〉

- キャロリン・エリス他「自己エスノグラフィー・個人的語り・再帰性：研究対象としての研究者」N.K.デンジン他編『質的研究ハンドブック 3巻 質的研究資料の収集と解釈』北大路書房、2006
- ドナ・ウィリアムズ『自閉症だったわたしへⅡ』新潮社、2001

16:20-16:50

戦時映画雑誌『満州映画』にみる女性スターたち
—日文化版と満文化版の比較から—

李潤澤 (D1)

日中間の衝突を目に見える形で表している政治体は、1932年3月1日の満州国の建国まで遡ることができる。『満州映画』は、その5年後の1937年に満州国の文化教育宣伝の中心機関として成立した「満映（満州映画協会）」の広報宣伝誌として同年に創刊された。この雑誌は満映とともに歴史の舞台に登場して、活躍して、硝煙とともに消えていった。うずもれるには残念な戦時日中関係の第一資料として嘆かれていたなか、『満州映画』は2016年に復刻された。

巻を開いてみて、「五族協和」など政治的スローガンが叫ばれていた満州国で『満州映画』は二つのバージョン（日文版と満文版）で発行されていた時期もあったことがわかった。さらに、この二つのバージョンは互いに言語が異なるだけの同じ内容のものだったわけではなくて、実際にはまったく別の記事が記載されているのが普通であった。社会の欲望を直接的に反映している女性スターに関する報道にも明確な相違点が存在している。その同床異夢の実態の背後には、日中文化関係の極めて複雑な性質が隠されていることが分かる。

本発表では、日中二つのバージョンがある巻（第1号～第6号）を考察対象とし、女性スターに対する報道を着目点として、日文版と満文版の相違を解説したいと思う。それによって、当時の雑誌の発行側の意図や、満州国における日本人読者と中国人読者の内在的欲望の差異を解明し、ひいては戦時日中の文化関係について理解を深めることでできればと思う。

16:55-17:25

『金閣寺』の英語翻訳における「建築」イメージの考察

寺浦麻由 (D1)

本発表では『金閣寺』とその英語翻訳 *The Temple of the Golden Pavilion* を、翻訳研究の観点から起点テキスト (ST) と目標テキスト (TT) として比べる。特に、10章で主人公の語りには浮かび上がる金閣寺の心象風景には、建築用語を使用したレトリック描写が頻出する。これが作品を特徴づけるレトリックの一部であり、翻訳というプロセスを経たTTにおいて、STとの差異が認められる部分でもある。

Berman (2000) は翻訳過程において生じる歪曲傾向のなかの一つ“*The destruction of underlying networks of signification*”で、テキスト全体において言葉が形成する関係性を理解して訳す必要性について述べた。吉田 (1981) は『金閣寺』について「レトリックの過剰が細部で文章を完成させ、作品の有機性を失わせてしまう大きな原因ともなっている」と述べた。しかし山崎 (1995) はその「過剰なレトリック」によって、金閣寺にまつわる『「美」のイメージ図式』が成り立つと提唱している。「レトリックの過剰」は、三島が特定のイメージを反復させるために表現した比喩的な言葉の連続により作り出されたものと言える。その三島の描写において Berman の提唱した“*underlying networks of signification*”が認められる。したがって、本発表では、金閣寺にイメージを重層的に重ね合わせるというレトリックの作り出す ST の意味ネットワークに注目し、TT でそれが維持されているのか、歪曲されているのかを検証する。

三島の翻訳作品の研究は、複数翻訳がないことから翻訳研究に取り上げられることは稀である。しかし ST と TT が対等な立場にある芸術作品と捉え、両者の言語使用の差異を追うことは翻訳研究の枠を超え、作品研究にも繋がると考える。